

徳山湾内の

大阪城の残石

会員 笹尾 誠

大阪城が夏の陣で落城後、徳川幕府は元和六年（一六二〇）西日本の諸大名六十四家に命令して大阪城の再建をさせた。

天守台の築造工事は、寛永元年（一六二四）本丸普請の一環として、この石垣工事が着手された。

この石垣は、西日本各地から一五〇屯を超える巨石を含め約五十万個の石と、膨大な人力と金力、約十年の歳月をかけて完成した。

当時、毛利秀就は、大阪城二の丸東側を担当し、九十六個の石を大津島から運んだ。運賃見積り書によると、石の大きさは、幅一丈×高さ四尺のものと、幅七尺五寸×高さ三尺六寸の二種あり、大津島から大阪までの九十六個の石の運賃は銀十四貫四百七十九匁となっている。現在の米の値段（十疋四千円とし）で換算すると、三、二五〇万円位となる。

（大阪城天守閣学芸員 内田九州男氏
日本古城友の会 藤井 重夫氏 記事より）

防長地名淵鑑（昭・六・刊御園生翁甫著）によると、大津島字十人墓（現在の瀬戸浜）に毛利氏船印一星の紋章を刻せる切石数十個、或は土中に埋没し、或は露出す……（略）と記載されているが、現在確認できるものは次表のとおりである。

所在地	大きさ（m）			摘要
	たて	よこ	高さ	
山口博物館	三・〇六	一・三〇	一・三〇	中をくり抜き水溜用となっている。
徳山文化会館	三・八	一・六	一・三〇	昭和57年7月現地より移す。
倉の窪	三・八	一・六	一・三〇	
トンネル出口	二・四	一・一〇	一・〇〇	
苅田邸前	二・四	一・一〇	一・〇〇	
トンネルの上	二・一〇	一・一〇	?	割出しのまま山中に埋没している。

（註）

(1) トンネル上の荒割の切石以外は、何れも毛利家舟印一〇の印が刻まれている。

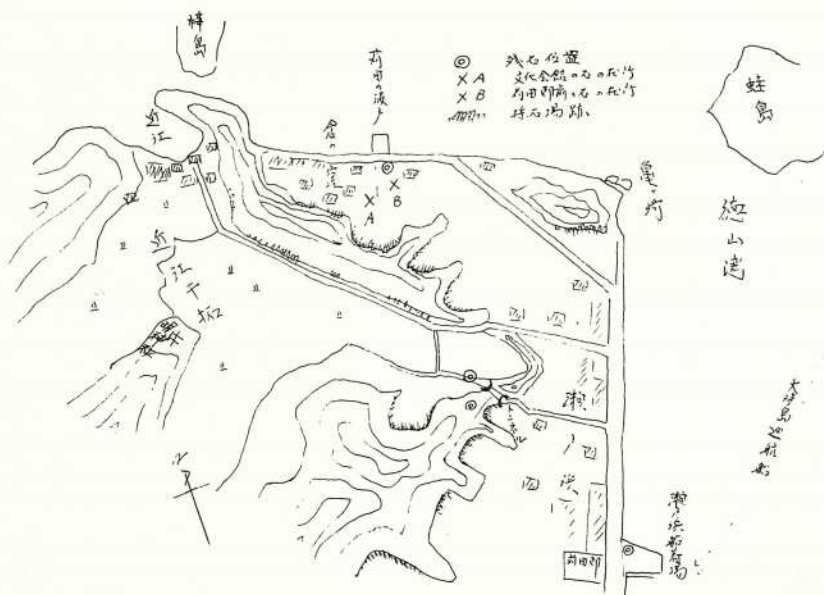
(2) 石質は大津島一帯の産、徳山みかげ（花崗岩）

一、山口博物館の残石

昔、大津島に在ったものを下松市恋ヶ浜の製塩豪家矢島家が、大津島より自邸に運んで庭に据えていた。(明治の末か大正初めかと思われる) たまたま、昭和十七年の災害による大浪を受け、恋ヶ浜漁民部落の人家等流失し、または倒壊したものの多数の被害を受けた。



石に刻まれた一星の舟印



当時の矢島家の当主（貴族院議員、正六位勲三等功五級陸軍歩兵大尉矢島專平、昭和三十年六月十七日没）も客室のはなれ、倉・物置・庭園等を流失、この時、庭の大坂城残石も磯ばたまで流された。当時の矢島家は、家運も既に傾斜気味であった。山口博物館に寄贈されたいきさつは判らないが、古老の話によれば、

「山口までの運搬は、当時の日立工場の下請業者天田組が請負い、厚板の上にコロを置き石をのせてカグラサンで引いたものである。昼は道の妨げとなるので、夜間作業であった。この仕事に私方にも出てやった。たしか、矢島家に在る時は石の中はくり抜いてなかった。」（下松市字恋ヶ浜 倉掛シゲ女 八十一才談）

中をくり抜いたのは運搬の際の重量軽減のためと伝えられているが、山口へ運搬の際に行ったものであろうか。元恋ヶ浜武居蒼作氏（元矢島家番頭）の妻女も矢島家に在るときはくり抜いてなく真四角の大石であったという。

二、徳山文化会館の残石

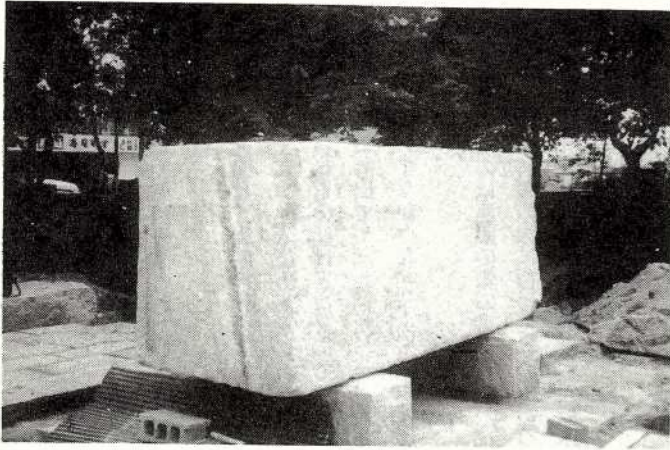
大津島倉の窪の船付場（通称苧田の波戸）の奥は、元山際までダボ（沼）であって、この石はこのダボの中に在ったが、大正から昭和初期にかけて、現在の苧田石材社長苧田稔氏がこの山で採石するに当り、仕繰土（採石の際に出る廢土）で



山口博物館の石

このダボを埋めたが、このとき残石を埋めた位置に井戸を作った。このたび徳山文化会館が建設されるに当り、この石を掘り出し徳山市へ寄贈したものである。

この倉の窪一帯は山際までダボ（現在は殆んど埋められたが一部残っている）が各所に在ったらしいが、このダボによって、満潮を利用して石の積出しを行ったのではあるまいか。



徳山文化会館の石



昭和五十七年七月 残石を掘り出す
（左 荻田社長 右 笹尾）

三、倉の窪の残石

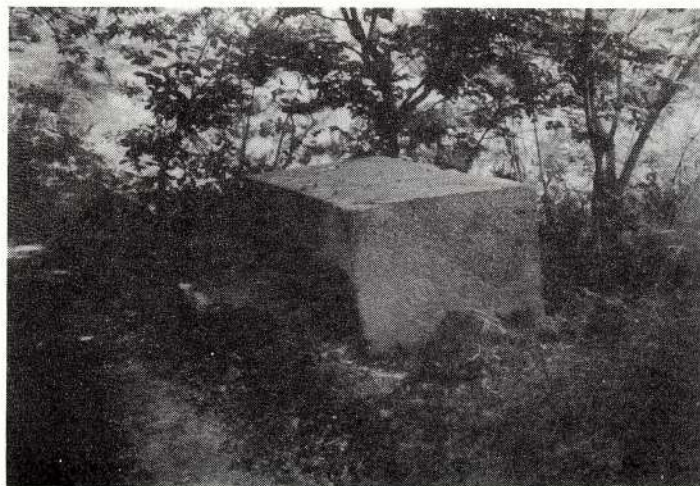
荇田波戸の向い、道路添いに在り残石の中では一番美しく代表的な石である。古老の話によれば、倉の窪の採石が始まった明治末期には既にこの所に据えられていたということである。

四、トンネル出口の残石

瀬戸浜（元は十人墓部落と云った）と近江干拓地を境する通称荇田山の近江側採石場の石材搬出のため、大正十年この山へ隧道を貫通したとき、荇田光治氏（稠氏の父）が発掘した。



倉の窪の石



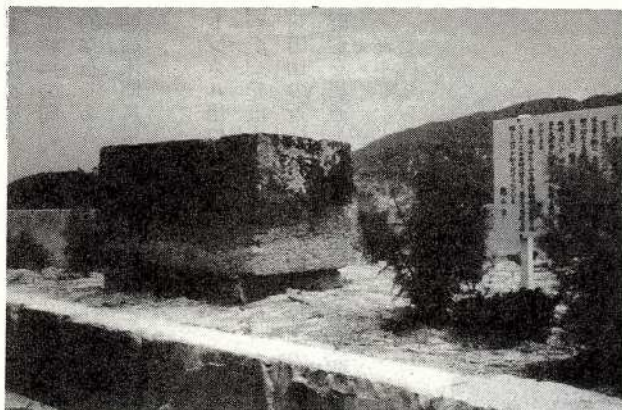
トンネル出口の石

このあたりからも相当採石されたらしく、昔は近江干拓（元禄十年一六九七）の中にある明神社のあたりまで舟が入り、石の積出しを行ったと云い伝えられている。

五、苧田邸前の残石

倉の窪苧田波戸の奥の畑の中に在ったが、何時の頃か、掘り出されたものであろうか。

昭和五十七年七月進藤福岡市長の来島を記念して世人に供覧するため、苧田桐氏が現在地に移した。



苧田邸前の石

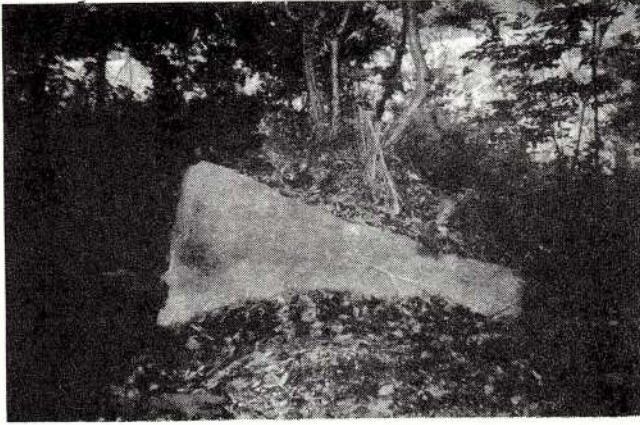
六、トンネル上の残石

これは荒割のまま、大矢（石切用の鉄の楔）で割った跡が鮮明に残っている。昭和五十六年二月附近一帯の山中を私は探索中に発見した。

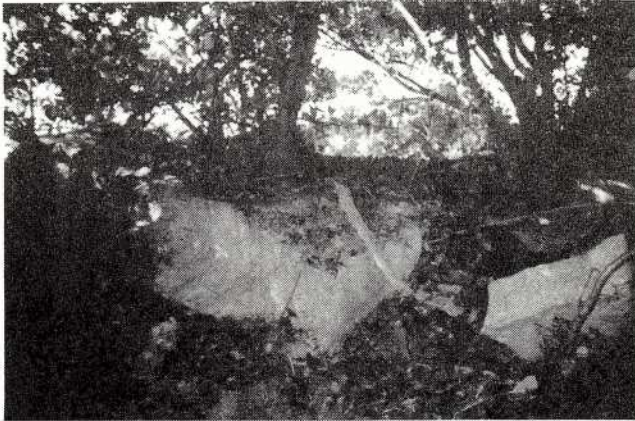
この石は長さが規格より三十糎許り短く、高さは土中に埋



トンネル上の石



残石の一部と思われる石（トンネル出口）



残石の一部と思われる石（トンネルの上）

まり測定できない。

このように荒割りのままであることは、割損じて不合格品となったものか、また、石の一部を石垣用等に切り取ったものであろうか。昔、発破（火薬）による石切りを行わない時

代は海浜の、或いは山中の転石を割り採石していたが、この附近一帯の山中には至る所にその形跡が散見される。この他にトンネル出口に一個、その上の山中に一個、大阪城の石を採石したときの残余の一部と見られる残石がある。